

王の阿闍梨耶としての龍樹

佐々木教悟

一

龍樹 (Nāgārjuna) が止住した土地に関しては、まず西域記卷十僑薩羅国の条の記述をとりあげることができる。

この僑薩羅国は舍衛城を都とせる僑薩羅国とはことなる国であり、それを区別するために慈恩伝卷四では南僑薩羅国 Dakṣiṇa-Kośalā と称している。その国は Kālinga より西北に向って山林を一八〇〇〇余里 (約三六〇マイル) 行ったところにあった。そこは中インドの南辺にあたり、現在の Bilāspur, Raipur, Sambalpur の諸県および Ganjam 県の一部にわたる地域を包含し、その首都は śrīpura (現在の Śrīpur) であった。そこはチベットの伝承にいう龍樹の出身地 Vidarbha すなわち、現今の Berar 地方にあ

たる。^①

七世紀に玄奘三蔵がこの地方を訪れたときは、仏教の伽藍が一〇〇あまり、僧徒が一〇〇〇人ほどいて、大乘仏教がおこなわれていたという。いまは玄奘の記述にもとづいて、つぎの二点を中心に考察してみようと思う。

(一) 都城の南、余り遠くないところに一古寺があり、そこにアショーカ王が建立したという塔があった。そこはかつて仏陀が神通をあらわして外道を降伏せしめられたところと伝説されていた。龍樹が居住していたのはその寺にして、当時の国王娑多婆訶 (娑多婆漢那 (南海寄帰伝) Śatavāhana) すなわち、引正王が龍樹にふかく帰依して、その寺院の諸門に衛兵を配してこれを守った。

(二) 国境の西南三〇〇余里(約六〇マイル)のところに跋邏末羅耆釐山(Bhāmara-giri)すなわち、黒蜂山とよばれる山があり、その岩山に引正王が龍樹のために一寺を建立した。その伽藍は五層よりなる大規模のものであった。龍樹はこの伽藍にも居住した。

この中、Satavāhana とは Andhra 王国の王朝の名にして、それが引正王と訳されていることに關しては、つとに學者によつて詳細な研究が發表されている。^④その王国の首都は時期によつて相異したとかがえられているが、都名のあらわれているところは、Kṛṣṇa 河の河口附近の Śrī Kakulān(すこ)上流の Dhānyakataka, Godavari 河上流の Pratiśthāna や Nāsikā などである。もしも玄奘の記述に誤りがないとすれば、南憍薩羅国とよばれた Beṣār 地方も、龍樹の時代には Andhra の領土内にはいっていたのであろう。また衛兵をして寺院の諸門を守護せしめたというのは、国王がその地を訪れた際には、その寺院に宿泊したこと、すなわち寺院が王宮を兼ねていたとみられることと、その当時外道の勢力が強くて、外道の勢力に對抗しつつ、しかも仏教内の伝統的諸部派の説を斥けて、大乘の学説を宣説した龍樹の身辺に危害が加えられるおそれがあったとみられることとの二つの理由をかんがえること

ができる。とくに後者の理由に關連して、かれの弟子とされている聖提婆(Aryadeva)が外道のために殺害されたことは學者の認めるところとなっており、龍樹についても、かれの名声があらわれるにつれて外道の攻撃は、はげしかったのではないかとおもわれる。

二

Bhāmara-giri に建立された伽藍については、かの西域記以外に法顯伝にも慧超伝にも、それに相当するとみられる記述がおさめられている。その伽藍のおおよその構造をしるせばつぎのごとくである。山麓十数里の地点より孔道を切り開き、山下において岩を掘鑿し、長廊、步簷、崇台、重閣が設けられていた。閣は五層よりなり、各層には四院ならびに精舎がつくられていた。精舎には仏陀と等身大の黄金仏が安置されていた。五層ある中の第一層すなわち最上層には仏像と經論等の典籍が置かれ、第二、三、四の三層はもっぱら僧徒の止住するところにあて、最下の第五層には淨人(āramika)の資産や伽藍の什物等が納められていた。法顯はさらに建築技術に關して詳細にのべている。すなわち、下からみて最下層は象形につくつて五〇〇の石室を、つぎの層は獅子形につくつて四〇〇房を、その

つぎの層は馬形につくって三〇〇房を、そのつぎの層は牛形につくって二〇〇房を、そのつぎの最上層は鳩形につくって一〇〇房を有していた。また莊嚴具には金銀を使用し、山頂より水をひいて泉水となして諸院の周囲を流れるようにし、石室には孔を穿ちてあかりとりを設け、岩石を削って各層間の昇降用階段もしつらえてあったといっている。しかるに慧超のしるすところによると、その伽藍は五層ではなくて三層であったとなし、伽藍の構築を引正王に帰せしめずに、龍樹が夜叉神をして造らしめたものとしている。玄奘や慧超の訪ずれた七世紀のころには、その伽藍はすでに破壊されていて一人の僧衆も見ない状況となっていたのであるから、たとい現地を訪ずれたとしても、巷間の聞き伝えをしるすの他はなかったであろう。しかしながら巷間の伝承のなかにも、真実に近いものがふくまれていることがあり、おおむね玄奘の記録の正確さが立証されているから、いまは玄奘の記録にしたがうことにしたい。

法頭の記録は、その旅行が玄奘よりも早い五世紀の初めではあったが実際にその地を踏んでいないのであるから、しるすところの伝説が一そう修飾化されているくらいがある。

さて玄奘のしるすところによると、引正王がこの伽藍の

構築に着手するや、工事半ばにして府庫は空虚となり、人力もまた疲れ尽きて工事担当者は憂色に沈んだが、龍樹の激励によってようやく完成へとこぎつけたという。おそらくは莫大な財力と労力とを費やしたのであらう。そしてその伽藍が到底人間わざとはおもわれぬ構築であったために、龍樹菩薩が夜叉神をして造らしめたというごとき伝説が発生したものとかがえられる。また、龍樹が止住したころには、その伽藍に三〇〇〇人の僧がいて毎日一五石の米が供養された(慧超伝[®])とか、あるいは四〇〇〇人の僧を召集して礼誦せしめた(西域記)とかしるされていることも、このような大規模の伽藍ならばあながち荒唐無稽の事柄ではない。そして上記のごとき想像を絶する岩山伽藍の結構は、後世のものではあるが、今日われわれが眼のあたり見るこののできる Golkonda(ハイデラーバード州 Hyderabad 郊外の故城)や Daulatabad(同州 Aurangabad 近くの故城)の岩山城塞からも容易に推察することができる。

さて、このようにして大伽藍はつくられたが、のちに僧徒の諍いが絶えなかったので、僧に対する信頼が失なわれ、民衆の中の凶暴なものが集まって暴力をふるい、伽藍を破壊するとともに僧徒を排斥した。その事件が発生してからのちは、やがて通路も失なわれて、だれもそこに住む

者がいなくなった。ときたま医術に長ずる者があって、その岩山の廃墟に住みつき、人の病氣に対して治療をほどこしたりしたことがあったが、やがてその人もどこへ行ったか消息が知れなくなってしまった、という古い伝えを、玄奘はあたかも手にとるがごとくにしるしている。

三

法顯伝ではこの伽藍の名を波羅越としている。そして波羅越を鵠となしているから（因名此寺為波羅越。波羅越者天竺名鵠也）、その原語は *pārāvata* であったとかがえられる。しかるにそれは *pārāvata* ではなくて *parvata* でなかったかという学者もある。*parvata* であったとすれば、それは山の意味になるが、ここでは法顯がしるしているように *pārāvata* なる呼び名でよばれていたと解したい。ところで *Bhramāra-giri* 伽藍の位置を現在の地図の上でどこに比定すべきかあきらかにできないのは遺憾である。学者の中には、上述の波羅越を *pravata* としてアーンドラ国内クリシュナー河南岸の *Nāgarjunakonda* にある *Sri-parvata* すなわち吉祥山の伽藍と同一のものとみなしている人があるが、玄奘がしるしている距離の関係を考慮すれば、それは妥当な見解とおもわれない。*Nāgarjunakonda*

は玄奘が案達羅國の都としてあげている瓶耆羅 (*Vengira, Vengipura*) から西へクリシュナー河沿いに一〇〇数マイルほどさかのぼった地点にある。そこには *Vijayapuri* とよばれる都があり、三世紀ごろには経済的にも文化的にも栄えていたことが知られている。^⑧ *Nāgarjunakonda* の谷間はダムのために現在は水没しているが、*Iksvaku* 朝の時代には、中心部に仏舍利を納めた大塔があり、その周辺に西山部、多聞部、化地部などの僧伽に寄進された僧院、セイロンの長老たちに寄進された僧院があったのである。

とくに注目されるのは、その地で発見された碑文のなかに、ヘヴィジャヤプリーの東方にあるシリパルヴァタ (*Siriparvata* = *Sriparvata*) の小法山上の僧院において (*Sriparvate vijayapuriya-puva-disa-bhāge vihāre chuladhammagiriya*)^⑨ という文があることである。タールナータのインド仏教史によれば、龍樹は晩年にシュリーパルヴァタにゆき、そこで修禪して初観喜地を証し、その地で命終したことをのべている。その地が修禪にふさわしい地であったことは、他の文献も証明している。ところでタールナータ史のいうシュリーパルヴァタが今のシュリーパルヴァタに相当するとみられるから、龍樹は晩年にこの山上の僧院に止住したのであろう。小法山とよばれるのは大

塔の東に突起した小山があり、それを指すものとかんがえられるが、その山上の僧院ならびに付属の制底堂(Catya)は、水没前にもっとも重要な一群の遺址とされていた。その制底堂は Bodhisiri とよばれた優婆夷の発願によって建立せられ、その僧院に止住した王の阿闍梨耶(ācārya、軌範師)たち、ならびにセイロンから来ていた長老たちに対して寄進されたものであることがあきらかにされている。⑥王の阿闍梨耶たちとは、おそらく龍樹のように国王の帰依を受けていた高德の僧であったとおもわれるから、龍樹もそこにいたのではなからうか。もしもそうであったとすれば部派所屬の僧院が周辺に散在していたなかに、この小法山僧院は大乗の出家の菩薩僧が止住することのできた僧院であったのであろう。そしてそのときの国王は、シャータヴァーハナ王朝の勢力がおとろえて、そのあとをひきついでこの地に君臨していた Ikṣvāku 朝の王であり、年代からいって Siri Virapurisadatta (西紀二二五年前の即位)なる王でなかったかとおもわれる。

龍樹の偉大な著作活動についてはすでによく知られているが、その教化活動についても、主として国王に対するはたらきかけを物語るところの Ratnāvali (宝鬘) や Subhilekha (密友書) などの作品が現存しており、これらの作

品を通して、かれの実践教学にふれることができるが、かれの生涯における活動は、ダクシナー・コーサラからこのアーンドラにかけての各地において、その死のときまでたゆまずに続けられたとみられるのである。

四

龍樹の帰依者であり外護者であった王として文献上にその名があらわれているものは、前掲の娑多婆訶(娑多婆漢那)すなわち引正王をはじめとして宝行王(宝行王正論)、乘土国王(龍樹菩薩勸誡王頌)、明勝功德王(勸發諸王要偈)、禪陀迦王(龍樹菩薩為禪陀迦王說法要偈)、市演得迦(王)(南海寄歸伝)であるが、これらの王名は結局のところ、王朝の名である Satavahana と都城の名である Dhanyakakala の訳語であるということが出来る。ただしこの中の明勝功德王のみは Satavahana の意識であるとかんがえられる。いずれにしても義浄が龍樹の書翰に関して記録するところにあげているように、

又龍樹菩薩以詩代書。名為蘇頌里離佉。訳為密友書。寄与旧檀越南方大国王号娑多婆漢那一名市演得迦^⑦

号としての娑多婆漢那と、名としての市演得迦が通用して

いたのであろう。前者が引正王、後者が禪陀迦王であることは確実であるとしても、また両者は同一の王を指したものであるとしても、その王は王朝の中のある特定の王を指しているのか、あるいはまた王朝の諸王を指す漠然とした呼称であったのかというに、前述の書翰に対する表題に求那跋摩訳は禪陀迦王の名をあげ、僧迦跋摩訳は諸王となしている。したがっていずれとも断定しがたいものがあるが、その書翰が密友書すなわち親友書翰と題されているところから考慮するならば、やはり龍樹が特別に親近感をもち、王もまた龍樹に帰依していた、ある特定の王を指すとみるのが妥当とかがえられる。それではその禪陀迦王とよばれた王は、かの王朝のいかなる王であったかというに、第二十七代の *Gautamiputra Yajñashri* (170—199, or 173—202, 在位) を指すという説がおこなわれてきた。この王の治績は碑文や貨幣などによって相当あきらかとなっているが、*Kaṇheri* や *Karli* の石窟寺院の奉獻、*Nasik* 第八窟の修理などの事業もかれに帰せられているから、前述の黒峰山伽藍の構築もこの王によっておこなわれたというのである。これに対して主として文学上の資料から、その王は第十七代の王 *Hala* (68AD—?) を指すという反対説があらわれた^⑧。それはハーラなる王が優雅な詩を作った詩人と

して知られており、シャータヴァーハナに關係してつくられたいくたの叙事詩などが存在しているところから、一般にシャータヴァーハナなる名をもってよばれている王はかれのような詩人王 (*Kavijā*) をもってきこえた人であろうというのがその理由である。

おもうに、後者の説をとるときには年代の点で合致しないものがあり、しかもシャータヴァーハナ家の王としてもっともよく知られている王は前者の *Yajñashri* にして、かれは王国の西部と東部とをとくに管理し支配した最後の王であったとされていて、*Dhanyakataka* の王すなわち禪陀迦王とするにもっともふさわしいのである。ダーニヤカタカが東部の都として栄えたところであったことは、すでによく知られているが、^⑨ 前にも一言したように、晩年に龍樹は *Udayana* 王の地にきたり、その王を教化し、そこからさらに *Sriparyata* におもむいた。そしてその地では、セイロン出身で *Hemadaya* を師匠として出家してインドに來た *Āryadeva* に逢い、かれにおしえを伝えたといわれる。玄奘の記録によると、南コーサラ国の都城の郊外の寺において聖提婆が龍樹の弟子となったかのごとくであるが、これはかれらが南コーサラで最初に出逢い、そののち吉祥山で再会したとみることはできないであろうか。とこ

ろでこのターラナータ史のあげるウダヤナ王とはいかなる王を指したのか不明である。鄔陀衍那(優填王)とは仏陀の時代に Kosambi を治めていた王にして、仏教を信奉した王として名高い王^⑩であるが、その王の名は、そのうち各種の物語の主人公に仕立てられて、いくたの文献にあらわれるようになっていく。すなわち、この王は造像供養の伝説と結びついて後世の文芸作品の中でも大きな役割を果たすのである。たとえば十一世紀のカシュミールの詩人 Somadeva の Kathāsaritsāgara に〈Udayana 王行状記〉なる一篇があるがごとくである。またその作品中の第四十一章に〈Citrāyas 王と宰相 Nāgārjuna の物語〉がおさめられているように龍樹もまた活動しているのである。そこにあらわれる宰相ナーガルジュナは菩薩の化身にして、仏陀と同じ道で歩んだ人とされている。いづれにしても、龍樹の化導をうけて仏教に帰依した王がウダヤナという名をもって人々のあいだで語りつたえられたのであろう。

なおここでとくに注目されるのは、この吉祥山伽藍において龍樹が初歡喜地を証したことが語られていることである。初歡喜地の内容は、かの十住毘婆沙論卷一の入初地品^⑪に説かれているが、そこには般舟三昧を父となし、大悲無生(無生法忍)を母となすことが明示されているから、か

れはこの地でとくに般舟三昧(pratyutpannasamādhi)を修したとかがえることができる。

五

さて龍樹は薬術に長じ、自ら妙薬を作り、それを飲用するとともに人にもわかちあたえたことがつたえられている。すなわち、龍樹菩薩伝には、かれが隱身術を求めようとして術師の許に行くに、術師は一丸薬をかれに示したが、かれはその丸薬の成分を見つけたことがしるされている。また西域記卷十には、かれが善く薬術を閑^{すく}って餌を喰し生を養い、寿年数百にして志貌衰えず、引正王も既に妙薬を得て寿また数百なりとのべている。またターラナータ史には、かれがナーランダ寺において大乗説法者五〇〇人を多年のあいだ鍊金液 Gser-hgyur-gyi rtsi の調合にて生活を支養したことがのべてある。おもうに、これはかれが Ayur-veda によく通じていたことを物語るものである。

古代のインドには四種の Upaveda (Āyur, Dhanur, Gāndhava, Śāstra) があり、その最初にこのヴェーダがあげられている。これは āyus に関する学問である。āyus には生命、活力、勇気、健康、長寿等の義がある。それ故に āyur-veda は生命の維持に関連して健康と医療の分野をか

ねた学問である。ところで、インドの医学は寿命ヴェーダの名のもとにバラモンの学習すべき三十二明の一つに数えられてきたが、また医方明(Cikitsā-vidyā)の名のもとに仏教徒の学習すべき五明の一つともされている。仏陀の時代には名医 Jivaka がいたし、アレクサンドロス大王がインドに遠征してきたときにはインドの医師をして蛇毒を治療せしめたことがつたえられており、カニシカの時代には王の侍医として有名な Caraka の名があらわれている。龍樹の時代にはインド医学は薬剤の方でも施療術の方でも相当に進んでおり、かれが医術にも通じていたとすることはなんら不合理なことではない。われわれは智度論の卷十^⑤をひもとくとき、そのことを証明するような文章に接するのである。

また医学に関係のふかい化学も発達しており、水銀その他の礦物が医療に応用されていた。さらに香料品を調整する製香法もおこなわれており、龍樹はこれらのことにも通じていたとされている^⑥。

やがて、Āyur-veda によく通じていた龍樹が長命の保有者であったことは一般に知られており、Wassiliew ののべるように一〇〇才ほどの長寿の人であったとかがえられている^⑦。

ところで、かれの死に関しては、およそ二つの伝説がつかえられている。その一つは龍樹菩薩伝がしるものである。すなわち、かれに対して忿疾を懐ける一小乗僧がいた。龍樹がまさにこの世を去ろうとしたときに、その小乗僧に向つて「あなたはわたくしが久しく此の世に住することを楽いますか」と尋ねた。かの僧は「実にねがいませぬ」と答えた。そこで龍樹は閑室に入り、日が経過しても出てこなかった。弟子たちが不審におもつて戸を破つて室内に入ると、かれはすでに蟬脱していたのである。

もう一つの説は西域記卷十にしるものである。すなわち、引正王は龍樹から妙薬を貰つていて長寿であった。王に一人の王子があつたが、母に対していうに「わたくしはいつ王位をつぐことができるのか」と。母が答えるに「父王の長寿は龍猛(龍樹)菩薩の福力が加わるところ、薬術のいたすところす。もしもかの菩薩が入寂したならば、したがって父王の寿命も尽きることにまいしょう。かの菩薩は智慧弘遠にして慈悲深厚であり、自己の身命は惜しまれないでしよう。あなたは菩薩のところについて、ころみにそのむねを告げ頭を乞いなさい。もしもその志をとげることができたならば、あなたのねがいもはたすことができますし」と。王子はそのことばにしたがつて龍樹の

止住する伽藍におもむいた。そのとき龍樹は讃誦経行しつつあったが、王子を見つけるや来意を尋ねた。王子は答えた。へわたくしはわが慈母と語り合った。その際わたくしは生あるもののいのちを尊重することは仏陀のおしえにあるが、実際として自ら一身を捨てて施すものはないというに、母はあなたのことはあやまっている。十方三世の如来はそのむかし仏道を求めて、あるいは身を投じて獣に食わしめ、あるいは肌を割きて鴿を救われたことがあり、あるいは、月光王はバラモンに首を施し、慈力王は飢えたる夜叉に血を飲ませ、種々の苦にたえて生類を助けたと語ってくれました。おもうに、あなたは仏門中において高志をもつてきこえる大徳にして、好んで施与をなしたもうと聞いております。わたくしは人の首を欲していますですがだれも施してくれるものはありません。もしも人を脅迫し殺害するようなことがあれば重い罪をうけなくてはなりません。あなたは仏法を修め聖果を期しておられますが、慈悲のころふかく、自らの生命を軽んずること朽株を捨てることがごとしとうけたまわっています。どうかわたくしに頭をください」とこうた。龍樹はこれを聞いてへあなたのいうことはもつともである。自分は仏陀のおしえをきいて布施波羅蜜を学んだ。人身は泡沫のごとくにして常住のものではない。

い。わたくしはこの身を惜しまない。しかしわたくしが死ねばあなたの父王も死にたもうであらう。だれがよくあなたの父を救うであらうか」と答えた。かくして龍樹はしばしのあいだその附近を逍遙していたが、ついに乾燥せる茅の葉をとって自ら頸を刎ねた。それはあたかも利刀をもって斬るがごとくであった。王子は眼のあたりこれを見ておどろき走り去った。門衛がこのありさまを王に申しあげると、王はふかく悲しみ、ついに王も死去した(以上、西域記の記述による)というのである。

このような二つの説についてかんがえてみるに、蟬脱死も自刎死も常識をこえた一見奇異におもわれる伝説のようであるが、南インドにあっては、実際にそれに似たことがある。こなわれていたようである。⑤しかしながら龍樹自身がかような仕方で実際に逝去したのかどうかはあきらかでないにしても、前者は大乗仏教徒としての龍樹に対する小乗僧の嫉視があったこと、後者は *Āyur-veda* に通じていた龍樹の長寿法のすぐれていたことからうまれた伝説とかがえられる。そしてこれらの伝説には、菩薩の利他の精神がもつともよくあらわされていて、菩薩の慈悲行が極度に高揚せられた時期に、龍樹という、真に菩薩としてふさわしい大徳が世にあらわれたことを物語っていると解せられ

る。もしも必要ならば、自らの骨肉さえも施捨する菩薩の犠牲的精神は、すでにかの十住毘婆沙論の分別布施品^④にあきらかにされているが、その所説は華嚴經卷十九廻向品五の經説にもとづくものにして、菩薩は、きたり求めるものを見れば、大歡喜心、明淨心、寂靜心、慈悲心、安樂心、無所著心、清淨心を生じ、きたり乞うものに、つねにそのねがいを満たさしめんとこのころをおこすものとせられる。龍樹の死をめぐって、われわれはここに二つの伝説から三昧と大悲のところが語られていることに気づくのである。

六

龍樹が入定死するや、南インドの諸国はかれのために塔廟を建て敬奉すること、さながら仏の如くであったとつたえている。王の阿闍梨耶としての龍樹の業績は実に大なるものがあつた。宝行王正論ならびに密友書においてかれが説いたおしえは、一言にしていえば

法こそ最上の政法なれ。法によりて世人は愛順す。実に世人の愛慕したるときには、「王は」此の世にても彼の世にても、「庶民より」欺誑せられず。^⑤

というにある。その法はへ一切の戲論寂靜にして吉祥の相

ある涅槃^⑥にいたらしめる法である。その法をば福德道、智慧道の二として、国王たるものの実践すべき道として具體的に説いているのである。そして前者をば十善道を中心に、後者をば有無の二執断尽を中心に説示している。もしも福德のみを修めて空の義を解せずば邪見に陥り、またもし一切空なりとして福德を修めざればそれもまた邪見に陥るといふのが、龍樹の実践教学の基本的な立場であつた。すなわち、福德道は能くもろもろの功德を生ずるものであり、智慧道は能く福德道中において、もろもろの邪見の執著を離れしめるものであることを知らなくてはならない。それ故に仏は諸法畢竟空と説くといえども、また三世を説くのであり、通達無碍にして咎なしと示されるのである。

このような学説をうけついで聖提婆は、師の命終後、南インドの各地において禪定を修しつつ經論の講釈などをおこない、多くの伽藍を建立し、大乘の根本道場を設けたといわれている。とくにかれは各地で外道の徒と論戦し、かれらを折伏したことで知られているが、外道のために一眼を要求せられて、一眼を与えたから Kanadeva (片目の提婆) とよばれたという。かれは外道のために暗殺されたといわれているが、また一説では Kāñci に近い Raingana-tha において Rāhulabhadrā に付法して、その地で入寂

したという。かれの名を刻んだ舍利壺が Guntur 地区の Maṇḍu において発見されている。龍樹の弟子にはその他に南インド出身の Nāgahvaya や Tathāgatagarbha などらびに東インドのベンガル出身の Nāgabodhi などいたが、かれらの活動は聖提婆とほぼ同時期であった。なお南インドにおいてこれまでに発見されている碑文の中、まさしく龍樹なる名をあげているものは、西紀六〇〇年ころの書体といわれる Jaggayyapeia 発見仏像台座のもので、そこには大徳龍樹阿闍梨耶の弟子勝光阿闍梨耶の弟子月光によりて寄進されたむねがしるされている。

いづれにしても、龍樹はインド仏教史上もっとも重要な位置を占めた人といえることができる。かれの撰述とみなされている作品に Catuḥ Śāya (四讃) とよばれる四つの讃頌 (Lokaṭīstava 超世間讃 Nirupamaśtava 無譬讃 Acintyastava 不可思議讃 Paramārthastava 勝義讃) [Oani No.2012, 2011, 2019, 2014] があるが、これらの讃頌はいずれも諸法の空なること、縁起生なることを説いており、無比者なる世尊の徳を讃嘆することによって、菩薩の到達すべき証悟の心境を示している。すなわち、無生法忍を獲得せる菩薩には、他の知識によってつくられたところの、あるいは煩惱によってつくられたところの、集まり (會坐 paṇṣad) への

恐怖心はないというのである。その理由は、かれは無畏弁才を得ているからであるとされる。そして大不可説・不可説劫の寿命の加持をえたるがゆえに、かれは寿の自在をうる^⑤とものべている。龍樹が一〇〇歳という満数のいのちを生きた人とかがえられているゆえんも、そこにあるとおもわれる。

註

- ① 大唐西域記卷十、大正五十一、九二九上。
- ② 大唐大慈恩寺三藏法師伝卷四、大正五十、二四一上。
- ③ Walleser: The life of Nāgārjuna from Tibetan and Chinese sources, JASB, Vol.ii, pt. i, p.115
- ④ 本田義英「龍樹対引正王の問題とその資料に於ける用語に就て」(『仏典の内相と外相』六九頁―九七頁)。
- ⑤ 「仏教史概説」インド篇八九頁。
- ⑥ 往五天竺国伝、大正五十一、九七六上。
- ⑦ 高僧法顕伝、大正五十一、八六四上。
- ⑧ J. Vijayātunga: Nāgarjuna-kōṇḍa, 1956, p.9
- ⑨ 静谷正雄編「インド仏教碑銘目録」No.704
- ⑩ Mañjuśrīmūlakalpa, Trivandrum Sanskrit Series, p.88
- ⑪ T. N. Ramachandran: Nāgarjuna-kōṇḍa, Memoirs of the Archaeological Survey of India, 1938, p.5
- ⑫ 南海寄帰内法伝卷第四、大正五十四、二二七下。
- ⑬ 高桑駒吉「龍樹の出生年代と案達羅朝」東洋哲学第一、二二号。
- ⑭ 本田義英「密友書の研究」(『仏典の内相と外相』四二頁)

- ⑮ Nilakanta Sastri: A History of South India, p. 92
 拙稿「龍樹時代におけるアーヘンラの社会と仏教」大谷学
 報第四十五卷第三号三頁。C. Sivaramamurti: Amaravati
 sculptures in the Madras Government Museum (B. M.
 G. M., Vol. IV, 4.5, 7)

stava, Giuseppe Tucci's Minor Buddhist Texts, Part 1,
 p. 239

(本学教授・仏教学)

- ⑰ Dharmapadaṭṭhakathā 1, p. 191; Jātaka IV, p. 375
 岩本裕訳「カタールリットサーガラ」①岩波文庫、二〇
 三頁の解説。
 ⑱ 十住毘婆沙論卷一、大正二十六、二五上。
 ⑳ 大智度論卷十、大正二十六、一三一上一下。
 ㉑ 影印北京版西藏大藏經總目錄 No. 5797, 5808, 5809 etc.
 仏教において修習 (bhāvanā) を増上するものに鍊金術があ
 り、それは現在においても上座部系仏教においておこなわれ
 ている(芳村修基編「仏教教団の研究」五六八頁)。
 ㉒ W. Assilew: Der Buddhismus, p. 318
 ㉓ 大智度論卷十六、投身飼虎、大正二十六、一七八下。
 ㉔ 大智度論卷十一、鵠本生、大正二十六、一四三下。
 ㉕ 仏本行集經卷五頭施、大正三、六七四上。
 ㉖ 大智度論卷十二、慈力王、大正二十六、一五一上。
 ㉗ 中村元著「インド紀行」伝統と文化の探求、一一二頁。
 ㉘ 十住毘婆沙論卷六、大正二十六、四九下。
 ㉙ 大方広仏華嚴經卷十九、大正九、五二〇上。
 ㉚ Ramāvaṇī 2. 28 和田秀夫「仏教の政道論」日本仏教学会
 年報第十八号三頁。
 ㉛ 山口益訳「月称造中論釈一」五頁。
 ㉜ 大智度論卷二十六、大正二十五、二五五中。
 ㉝ Amṛtakāra's Samāsārtha of Nāgārjuna's Nirāpamyā-